

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-12

女性バーテンダーはボトルのラベルを見せてから専用クロスで瓶口を覆って抜栓した。

コルクの栓を横田に渡した際、テイस्टィングは不要だと言われると、真紀、ヒデコ、朝倉、横田の順にシャンパンをグラスに手際よく注いだ。

「噂のバーテンダーです」

無駄のない一連の動作に見とれていた朝倉に、真紀はわざと勿体をつけて言った。

「菜々緒と申します」とお辞儀をして名乗るバーテンダーに向かい、「君の瞳に乾杯」と朝倉は言って、グラスを掲げた。

バーテンダーは気障で馴れ馴れしい口を利く初対面の中年男に辟易するものの、ママの手前、愛想笑いでその場をしのいだ。

「嫌われたようだね」と横田はバーテンダーの後姿を目で追いながら、薄笑いを浮かべて朝倉を冷やかした。

「先ほど言われた耳障りのいいセリフをどこかで聞いたような気がするのですが……」と記憶を辿るようにヒデコは言って、その場を取り繕おうとした。

「映画の『カサブランカ』を観たことは？」

バーテンダーに賛辞を呈するつもりで、ボギー（映画カサブランカの主演俳優ハンフリー・ボガードの愛称）の名台詞を、咄嗟に思いついて口にした朝倉は、座が白けてしまった状況に後悔しているところを、ヒデコの問いを立てることで打開しようとした。

「母が沢田研二の熱烈なファンでしたので、確か、カサブランカのタイトルがついた曲を聴いたような……」とヒデコが言いかけた。

「カサブランカ・ダンディ！私が高校に入った頃にジュリーが歌った話題曲。ジュリーは沢田研二のニックネームなの。その曲のせいで半世紀以上前に封切られた映画がリバイバルされて、ボギーの格好良さに憧れた人が多かった時代でした」と真紀は言って、ヒデコの記憶を明快にした。

「さっきはボギーの名台詞を真似したんだけど、酷い猿真似になってしまった」

「やり手画商も形無しだね……。そんなに気落ちしなくてもいいよ、大抵の客は押しなべて、この店に住み着いている魔物に調子を狂わせられるんだ」

「魔物とやらも、横田画伯には取り付けないでしょう」と言って皮肉る朝倉に、「いや、実はこの私も……」と言いかけて次の言葉を呑み込んだ横田を前にして、まだ裸婦画を朝倉に見せていないことを心づいた真紀は、奇妙な感覚を覚えた。